

“災害情報における放送と通信の連携研究会” 報告（概要）

## クロスメディア・マルチプラットフォーム 住民一人ひとりへ 次世代の災害情報伝達

日本災害情報学会“第2次デジタル放送研究会（通称でデジ研'2）”では、(財)放送文化基金の助成・援助を受け、放送と通信の連携に関する国内外の調査を行い、両メディアをどう組み合わせれば災害情報の伝達に有効か探ってきた。この調査研究の成果について、報告会を開き、公開討論をおこなった。以下その内容を簡単に報告する。（デジタル放送研究会委員 田代大輔 気象キャスターネットワーク）

- 日時：2008年7月12日（土）13時～16時45分
- 場所：東洋大学白山校舎
- 参加：約70人（全国の放送関係者が約半数）
- 内容：

### 第Ⅰ部 地震時の情報提供 座長：天野 篤（NIED、アジア航測）

招待講演：鈴木 郁子（NHK 新潟）

話題提供：東方 幸雄（NTT 東日本）、澤 陽之（SFF・アジア航測）

鈴木氏からは「地デジ時代の災害報道 2007 新潟県中越沖地震」と題し、災害報道としては初めて行われたローカル発「マルチ放送」の裏話や苦勞などが紹介された。とくに大きな課題として、

- 1) 制作側の問題として人員・機器の確保や情報共有のシステム不足
- 2) 避難所に設置したデジタル放送の PR 不足  
…d ボタンを知らない人も多く、画面の自動切替機能など欲しいといった発言があった。

また関連した話題として、東方氏からは、安否情報（災害用伝言ダイヤル171）の利用状況について、澤氏からは、現地調査で訪れた長岡市の災害情報伝達の取り組みについて、紹介があった。



### 第Ⅱ部 洪水時の情報提供 座長：藤吉 洋一郎（大妻女子大学）

招待講演：佐藤 宏明（FRICS）

話題提供：鷹野 澄（東京大学）、蔡 垂功（大阪市）

佐藤氏からは、「放送と通信を活用した河川情報の提供」と題し、地デジや携帯端末を利用した大和川河川堺市避難訓練（今年3月実施）の内容や課題が紹介された。訓練に参加した人へのアンケート調査では、地図やマークの見せ方（大きさやスクロール機能など）に対する意見が多数あったことが報告された。



また関連した話題として、鷹野氏からは、荒川下流河川板橋区避難訓練を視察した際の報告、蔡氏からは、大和川河川堺市避難訓練の際の地上デジタル画面の使い勝手などについての報告があった。

### 第Ⅲ部 韓国における災害情報提供 座長：天野 篤

帰朝報告：中村 功（東洋大学）、大西 勝也（大妻女子大学）、水上 知之（三重県）

中村氏からは、「韓国における携帯電話を用いた災害情報伝達」と題し、CBS（Cell Broadcast Service…基地局エリアごとの情報伝達サービス）が韓国では早くから取り入れられ、災害文字サービスが運用されていることが紹介された。日本では、DMB（ワンセグ放送）→CBSの流れだが、韓国では逆にCBS→DMBの流れで技術が進んでいる。このCBSとワンセグの連動は、輻輳が発生しないこともあり、災害時に大いに有効と考えられる。

加えて大西氏からは、KBS（韓国放送公社）のワンセグを利用した災害放送についての紹介、また水上氏からは、韓国の災害情報CBSの仕組みなどについて報告があった。（※“災害”を、韓国では“災難と表現）

さらにこのセッションの質疑応答では、日本国内ではじめてCBSのサービスを始めた飯能市の取り組みも紹介された。



### 第Ⅳ部 総合討論・総括（提言） 座長：藤吉 洋一郎

パネリスト：天野 篤、國崎 信江（子どもと大人の危機管理教育研究所）、佐藤 宏明、鈴木 郁子、東方 幸雄、中村 功

#### <各セッションから浮かび上がった課題>

- ▶ データ放送や携帯端末などの操作性について  
機能が高度化するほど、現状はユビキタス（いつでも・どこでも・だれでも）から遠ざかっているのではないかと  
・大和川の実証実験は、1つの貴重な提言である  
・アナログラジオやデジタルラジオの存在も大きなヒント
- ▶ 今後とくに期待される携帯電話の、キャリア毎の取り組みの温度差  
災害情報の発信の一元化には、キャリアを超えた連携が必要
- ▶ データの一元化や信憑性  
仕組みを含め、省庁を超えた共有プラットフォームが必要

#### <提言>

～発信のマルチメディア化から、利用のマルチメディア化の時代へ～

デジタル放送、インターネット、メール、CBS、ラジオなど様々なメディアが“連携”し合う、つまり“クロスメディア”で災害情報を伝達していく方法を、考えていく必要がある。その際、欲しい情報に誰でも簡単にたどりつける“アクセシビリティ”や、“情報の交通整理”が欠かせない。